

Title	「河童駒引考」(石田英一郎著): 比較民族學的研究
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.122(258)- 123(259)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

評書

「河童駒引考」(石田英一郎著)

比較民族學的研究

松本信廣

此戰爭の始まる少し前に渡歐され、コッパース師に師事された著者が、柳田國男先生の古稀を記念してその「山鳥民譚集」の中に盛られた「河童駒引」及び「馬蹄石」の二問題を取上げ、之を日本以外の類例と結びつけ、日本民俗學と、文化圈學派の民族學とを一つに纏めんと試みた力作であり本邦學界に清新な研究的視角を啓示した近來の快著である。柳田先生の著書は本邦民俗學の礎石となつた傑作であり、河童が馬を水中に引き入れんとする傳説の發生を論じ河童を猿と見る思想、猿を厩馬の保護者となす習俗に就て考證し、河童は水神の一變形であり、上古馬を水の神に供へた儀式の記憶が、かゝる傳承として残つてをるのではあるまいかと述べ、更に「馬蹄石」に於て白馬に騎りて天降り給ふ神々の信仰「駒形」名稱と神降臨の遺跡との關係等を明かにし、ついで古への名馬の如何に水邊と因縁深きかを考證し、全國に残る馬蹄石系傳説の意味を解明せんと試みられてをる。石田氏は、此著作の後を受けて、水神

と馬との關係を中國及びヨーロッパの文獻の中に探り、水邊に牧を構へて龍種を求むる思想の日本と大陸との間に關聯あることを指摘し、此種の説話の淵源の一半は、牝の家畜を放つて牡の野獸と交らしめ、以て強健な仔獸を得んとしたアジア大陸で實際行はれてきた牧畜習俗の中に求めらるべきも、水中の神馬の傳説は世界的に分布せるをもつて之を單なる遊牧民族の慣行のみを以てしては解き得ざる謎なりとし、次に牛と水との關係に就て考究し、その傳播の廣汎なること、恐らく最初亞歐大陸の南縁を點綴する先アフリカ期の古代文化地帯に於て牛が先づ農耕の關係から月、大地、女性豐饒力と結ばれ、次いで植物栽培民にとつて生命の源泉たる水と密接な關係に入り水神として考へられるものなることを推し他方家馬は、牛よりも遙か北方に於て内陸アジアの草原地帯を中心に飼育せられ、南方の農耕民とは別個の遊牧的騎乘民の文化を發展せしめてゐたが、此系統の文化の南方に進出するに伴ひ、水神としての牛に

とつて代り、また、之と相並んで、水界の靈怪となり、水神への供犠獸ともなつたのであらうと論じ、第三章に於て猿と馬との思想上の結合は、印度より中國を経て日本に至る東亞の各地に古くから見られる現象であり、猿そのものも水邊の動物として水中の靈怪たらんとする傾向を有つことを論じてをる。

元來柳田先生の著作は地域を日本だけに限り、句ひ豊かな作品であるが、周縁地帯の傳承との關係に就ては充分觸れられる所がない。此點南方熊楠氏は和漢洋の文獻を驅使して興味深い論述をされたが最近歐州に發達した科學的研究とは相交渉なく、學問的ならざる恨みがあつた。石田氏の著作は歴史學派の文化圈説を祖述し、之と日本民俗學とを連結せんと試みて我國學界の從來の缺陷を補ふものであり、吾々を裨益せしむる點が多い。殊に同氏の得意とせられる點はそのアジア内陸地帯に於ける馬匹の問題であり、之が東西に於ける傳播が傳承上に及ぼした影響の闡明は、文化史的研究に多くの光明をもたらした論證と云へる。之に比して今少し掘り下げていたゞきたかつたのは南方に於ける牛の問題、之と水信仰との結びつき方、金屬文化發達の歴史等の諸論題であり、吾々は從來此方面の概括的研究に通曉してゐなかつただけに著者が今後陸續此種の業績を公けにせられ、更

に一層詳細確實な資料を補足敷衍していた
べきたいものである。文化圈説が學界の全
面的承認を得んが爲にはなほ世界各地の
精細な調査が必要であり、東亞の地域の考
古、民族・人類・言語學的研究の未發達が
此點に於ける綜合的考察に多大の支障を
あたへるものと云はねばならぬ。此種問題
の解決には學者は從來の如く個別的な研究
によらず、相協力して、各地々域の研究調

評書

「科舉」

(宮崎市定著)

竹田龍兒

かねてから科舉については多大の興味と
關心とを寄せてゐた私は昨年本書の刊行さ
れたのを知るや逸早く一本を手に入れて貪
る様に通讀した。著者が宮崎教授だといふ
丈ですでに本書の内容に對して大きな期待
を懷いた。跋文によれば本書は幾多不利な
條件のもとに急いで纏め上げられたものゝ
如くであり、著者は我乍ら自信のない書物
であると謙遜してをられる。さう言へば従
來の著者の多くの論考に比して稍精彩を缺
く憾みなしとはしないけれども、やはりあ
れだけの問題を見事に料理された腕前の程
は敬服の他はない。

査に従事しなければならず、かゝる協力の
上に石田氏の著論も今後の發展を見ること
と信ずる。吾人は、震災に藏書を失はれた
著者が、不死鳥の如く、灰燼の中より立上
り、此著を提供せられたその精神力に畏敬
の念をいだくと共に此好著が弘く學界の各
方面に愛讀せられ、新研究を誘起せんこと
を期待する者である。(筑摩書房刊)

思ふに科舉の問題は余りにも關聯する
ところが多方面で相當の難物であるためか
本邦には未だ一冊の專著すら存在せず、ま
た關係論文の如きも宮崎教授が參考資料著
作論文一覽中に擧げてをられる數種以外に
加藤繁博士の「科舉の政治的意義」(支那
學雜草所收)、清水泰次博士「科舉の研究」
(早稻田大學、文學思想研究第四卷)、勝又
憲治郎氏「秀才の辨」(東方學報 東京第
六冊)荒木敏一氏「宋代初期の殿試に於け
る狀元決定の方法」(東洋史研究八の四)
等があるに過ぎない有様である。
しかも科舉の制度たるや隨唐以來清末に

至るまで千數百年の永きにわたつて沿用せ
られ來つて、中國の政治・社會・文化の上
に實に量り難い影響を及ぼしてゐるのであ
つて、苟しくも中國の舊社會について論議
する場合にはこの問題に觸れないで済ます
ことは不可能だと言つても恐らく過言では
なからう。然るに多くの人々はこの制度の
本質なり意義なりに關しては甚だ常識的乃
至は獨斷的な見解を有してゐるに過ぎない。
これは何に基因するか、言ふまでもな
く適當な概説書が無かつたからである。今
日まで科舉に關する研究書が一つも出版さ
れてゐないといふのは全く不思議な現象
で、これこそ日本に於けるシナ學の貧困を
物語るものは他ならない。今回宮崎教授に
よつて始めて多年の渴望が醫せられること
となつたのは我々にとつての大きな喜びで
なければならぬ。著者は本書に於いて科
舉の問題をあらゆる角度から論じてをら
れ、凡そ科舉に關する限り殆んどすべてが
網羅し盡されてゐる、それ許りでなく動も
すればこの種の書物が陥り勝ちな單なる制
度史としての平板な敘述から巧みに脱却す
ることに成功してをられる。

先づ本書の目次を紹介すれば、緒論・第
一章 科舉の沿革・第二章 清代に於ける
科舉の制度・第三章 近世支那社會に科舉・
第四章 科舉制度の崩壞 となつてをり、
そのうち第二章に特に多くの頁が割かれて